

令和 2 年 9 月 28 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463240

研究課題名(和文) 発達障害のある看護学生の看護実践適応に向けた教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the educational program that enables the nursing student with a developmental disorder to adapt to the nursing practice

研究代表者

遠藤 みどり (ENDO, MIDORI)

山梨県立大学・看護学部・教授

研究者番号：90279901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害が疑われる看護学生の実践適応を促す支援の在り方を明らかにすることが目的である。学生が最も学習困難な看護学実習の行動特性を25項目のチェックリストとして作成し、信頼性・妥当性の検証から、気になる学生の行動特性を弁別する可能性を明らかにした。また、行動特性チェックリストの活用によって、看護学実習前からの実習内容の視覚的提示、行動のイメージ化、自己管理や社会的スキルの個別指導を行う必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護学生の看護実践力を育成する看護学実習において、学習困難な状況に陥りやすい学生の行動特性を『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』として作成し、信頼性と妥当性を確認できた。したがって、『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』を活用することにより、看護教員のみならず看護学生にとっても自己の行動特性の傾向を踏まえた行動変容や支援方法がわかり、看護学実習の円滑な遂行に繋がる。また、看護学生の自信や学習意欲を高めるとともに、関わる教員の負担や困難感の軽減に繋がる。さらに、看護学生の看護職者としての就業移行が円滑になり、看護職者の人材確保・定着に寄与すると考える。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to identify the appropriate way of support to encourage the adaptation to the nursing practice by the nursing students who may have a developmental disorder. The check list consisting of 25 items on the behavioral characteristics for the nursing practice, which are the most difficult to learn for the students, were prepared, and the possibility to distinguish the behavioral characteristics of the students of concern were clarified based on the verification of the reliability and validity. Also, the necessity of the visual presentation of the practice contents, behavioral imaging, and individual tutoring of self-management and social skills before the nursing practice was indicated as a result of utilizing the behavioral characteristics checklist.

研究分野：臨床看護学

キーワード：発達障害 看護学実習 看護教育

1. 研究開始当初の背景

独立行政法人日本学生支援機構の実態調査では、全国の大学、短期大学及び高等専門学校 1,197 校のうち、障害のある学生が在籍している学校は 793 校、障害のある学生の総数は 11,768 人であり、全体の学生数に対する障害学生在籍率は 0.37%と報告されている(2012年5月1日現在)。また、調査開始の2005年度には、障害学生数は5,444人、障害学生在籍率は0.16%であったのに比し、2012年度までの7年間で、障害学生数が倍増している現状にある。さらに、障害種別では、発達障害(診断書有)が学生数1,878人で、全障害学生数の16.0%を占めており、年次推移では各年2%増加している¹⁾。

一方、看護学教育においても、2001年に保健師助産師看護師法改正により絶対的欠格事由が排除され、さまざまな障害をもつ学生が看護学を学ぶ可能性が拡大した。身体的な障害は明白であり対策を講じやすいが、発達障害のように、ある特定の課題に対して遂行が困難な障害は、単なる成績不良と見なされ、障害が見逃されやすい状況にある²⁾。そこで申請者らは、平成23年度に全国の看護師養成機関に発達障害の可能性のある看護学生の実態調査を行った(科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究)。その結果、341校から得た245例の事例のうち文部科学省実施調査の基準に準じた判定から145例に何らかの発達障害がある可能性が疑われた。障害の種類は「こだわり・対人関係」が最も多く(63.4%)、続いて、「聴く」の学習障害(54.5%)、「不注意」(41.4%)であった(重複あり)。これらの学生で特に得点の高かった項目は、「聞きもらしがある」、「指示の理解ができない」、「内容をわかりやすく伝えることができない」、「早合点や飛躍した考え」、「課題を順序だてて行うことができない」、「相手の感情や立場を理解しない」などであった。また学生がもっとも困難であった学習場面は「実

習での患者ケア」、「実習での指導者・教員とのかわり」、「実習での患者・家族とのコミュニケーション」、「グループワーク」であり³⁾、いずれも看護学実習に関わるものであった。

申請者らは看護学生の実習に関わる中で、実習前の大学での机上学習では問題がない学生が、実習では、対象との円滑な援助関係や思考過程が踏めず、実習の遂行が困難な学生の状況を経験してきた。このような学生の学習困難な背景の一つには、学生自身も気が付かない発達障害の可能性が考えられた。そこで、看護学実習において、学習困難な学生の行動特性を捉えることができれば、看護の専門職を志向し、看護養成機関に入学した看護学生が、発達障害を有していても、早期発見・対処のためのスクリーニングツールを活用した教育プログラムの提供により、看護実践能力を維持・向上し、着実な看護専門職としての就労移行やキャリア発達に繋げられるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

発達障害の可能性のある学習困難な看護学生の看護学実習における行動特性チェックリストを考案し、その信頼性・妥当性の検証をもとに看護学実習の学生の円滑な遂行を支援する教育プログラム構築への示唆を得る。

3. 研究の方法

(1) 『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』(案)の作成

研究者間で定期的に会議を行い、大学生の発達障害に関する専門家(信州大学 高橋知音先生)の助言を得て検討した。検討では、共同研究者の池松らが行った、看護教員から見た指導が著しく困難と感じる看護学生の現状の全国調査で使用した調査75項目及び高橋知音氏が開発した統合版困り感尺度の23項目(大学生生活における困りごと尺度を含め、

高橋知音氏の使用許諾及び助言)を参考に、看護実践適応との関連から、看護実践能力や社会的スキルに関連する文献検討を行ない、『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』(案)を検討した。

(2) 『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の信頼性・妥当性の検討

対象者：看護系大学で看護学実習を担当した経験のある教員で、直接的に学生への実習指導を行っている者。

調査内容：属性として教員の担当分野、指導経験年数とし、『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』について回答は「分からないうい」、「気にならないうい」、「少し気にならないうい」、「気にならないうい」、「とても気にならないうい」の五肢択一とした。

分析方法：『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の項目について「気にならないうい」は各0点、「少し気にならないうい」を1点、「気にならないうい」を2点、「とても気にならないうい」を3点、として得点化し、記述統計量を算出した。また、『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』によって看護学実習における「気にならないうい学生」と「気にならないうい学生」の評価の違い(弁別力)を各項目の得点から算出した。さらに、気にならないうい学生の『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の項目について、2名の教員の評価の一致率を係数から算出した。分析には統計ソフト SPSS ver.20 を用いた。倫理的配慮として、所属大学ならびに調査協力大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究協力者へは研究の目的、方法、内容、倫理的配慮等について依頼文書で十分に説明し、自由意思、匿名性の保持、撤回の保証などを確約した。本研究における利益相反はない。

4. 研究成果

(1) 『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の作成

発達障害が疑われる学生を早期に把握し、個別指導による看護実践への適応を支援するために、「物事の優先度を考え、計画的に課題に取り組める」「物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる」「人の気持ちを想像し、寄り添うことができる」「集団の中で協力し、協調性がある」などの25の質問項目で調査票を作成した。また、チェックリストの活用は看護学実践への適応を推進することを一義的な目的とした「看護学実習における学生の行動特性なチェックリスト」とした(表1)。

表1 看護学実習における学生の行動特性なチェックリスト

調査項目	分からないうい	気にならないうい	少し気にならないうい	気にならないうい	とても気にならないうい
1 物事の優先度を考え、計画的に課題に取り組める。					
2 ストレスに感じることがあったときに相談することができる。					
3 気分の動揺があっても、もとに戻ることができる。					
4 失敗してもバニクにならないうい対処できる。					
5 物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる。					
6 衝動的な言動をとらずに、相手を尊重できる。					
7 他者の思いや考えを受け入れ、尊重することができる。					
8 約束した時間を守ることができる。					
9 指示物を見落とさず、必要な準備ができる。					
10 誤字・脱字なく、規定通りにレポートや記録が書ける。					
11 スケジュールの管理がしないういできる。					
12 配布物の管理ができ、忘れ物をしないうい。					
13 授業変更等、予定していたことが急に変更された場合にも柔軟に対応できる。					
14 レポートや課題を期日までに仕上げるができる。					
15 二つ以上の作業を同時に行うことができる。					
16 細かいところにとらわれずないういいられる。					
17 人の気持ちを想像し、寄り添うことができる。					
18 他人が考えていることを理解することができる。					
19 集団の中で協力し、協調性がある。					
20 表情やしないういさを見れば、その人の気持ちがわかる。					
21 人や場所に応じた挨拶ができる。					
22 グループワークで自分の考えを他者にわかりやす(話す)ことができる。					
23 人と雑談することができる。					
24 必要な時に人に連絡したり、報告したり、相談できる。					
25 他者の皮肉や冗談に対して柔軟に対応できる。					

(2) 『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の信頼性・妥当性の検討

分析対象の概要:看護系大学教員 16 名から 44 部の調査票を回収した。指導経験は 1~35 年で平均 9.86±10.35 年であった。44 部のうち、想定した気になる学生と気にならない学生は両者とも 11 名であり、全体と気になる学生の回答とのクロンバックの係数は 0.97 であった。

「気になる学生」と「気にならない学生」の回答結果「気になる学生」グループは平均 28.1 点(範囲 8~47 点)、「気にならない学生」グループは平均 0.8 点(範囲 0~3 点)であった。教員二評価者間で 2 組以上が「とても気になる」と回答した調査項目は、25 項目中、4 項目で『5. 物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる』、『15.二つ以上の作業を同時に行うことができる』、『16.細かいところにとらわれすぎないでいられる』、『20.表情やしぐさをみれば、その人の気持ちがわかる』であった。また、2 組以上で、両者が「気になる」、または片方が「とても気になる」に回答し、片方が「気になる」とした項目は、13 項目であった。

教員二評価者間の評価得点の比較

教員二評価者間で、両者が「とても気になる」、「少し気になる」、「気になる」のいずれかに回答し、70%以上の一致率であった項目は、『1.物事の優先度を考え、計画的に課題に取り組める』、『4.失敗してもパニックにならず対処できる』、『5.物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる』、『7.他者の思いや考えを受け入れ、尊重することができる』、『14.レポートや課題を期日までに仕上げることができる』、『19.集団の中で協力し、協調性がある』、『24.必要な時に人に連絡をしたり、報告をしたり、相談できる』の 7 項目であった。

教員二評価者間の評価得点の一致率

教員二評価者間の評価得点の一致率を見る

ために、係数を算出した。係数の値は -1 1 となり、数値が 1 に近いほど評価者の評価は一致していることを表し、0.01~0.20 は slight(わずかに一致)、0.21~0.40 は fair(おおむね一致)、0.41~0.60 は moderate(適度に一致)、0.61~0.80 は substantial(かなり一致)、0.81~1.00 は almost perfect(ほとんど一致)とした基準である(Cohen's coefficient of agreement)。25 項目中、教員二評価者間でほとんど一致していた項目は、『4.失敗してもパニックにならず対処できる(0.862)』で、かなり一致していた項目は、係数の値の高い順から『20.表情やしぐさをみれば、その人の気持ちがわかる(0.778)』、『5.物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる(0.777)』、『16.細かいところにとらわれすぎないでいられる(0.714)』、『7.他者の思いや考えを受け入れ、尊重することができる(0.708)』、『15.二つ以上の作業を同時に行うことができる(0.701)』、『24.必要な時に人に連絡をしたり、報告をしたり、相談できる(0.638)』、『3.気分の動揺があっても、もとに戻すことができる(0.635)』、『11.スケジュールの管理がしっかりできる(0.633)』、『19.集団の中で協力し、協調性がある(0.624)』の 10 項目であった。その他、1 項目を除いて、13 項目は、0.390~0.602 の値であり、「おおむね一致」あるいは「適度に一致」していた。一方、一致していなかったのは 25 項目中 1 項目であり、『10.誤字・脱字なく、規定通りにレポートや記録が書ける(0.099)』であった(表 2)。

表 2 教員二評価者間の評価得点の一致率

調査項目	p値	係数
1 物事の優先度を考え、計画的に課題に取り組める。	0.000	0.602
2 ストレスに感じることがあったときに相談することができる。	0.005	0.447
3 気分の動揺があっても、もとに戻すことができる。	0.000	0.635
4 失敗してもパニックにならず対処できる。	0.000	0.862
5 物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる。	0.000	0.777
6 衝動的な言動をとらずに、相手を尊重できる。	0.005	0.506
7 他者の思いや考えを受け入れ、尊重することができる。	0.000	0.708
8 約束した時間を守ることができる。	0.070	0.305
9 掲示物を見落とさず、必要な準備ができる。	0.004	0.462
10 誤字・脱字なく、規定通りにレポートや記録が書ける。	0.553	0.099
11 スケジュールの管理がしっかりできる。	0.000	0.633
12 配布物の管理ができ、忘れ物をしない。	0.005	0.485
13 授業変更等、予定していたことが急に変更された場合にも柔軟に対応できる。	0.004	0.542
14 レポートや課題を期日までに仕上げることができる。	0.002	0.525
15 二つ以上の作業を同時に行うことができる。	0.000	0.701
16 細かいところにとらわれすぎないでいられる。	0.000	0.714
17 人の気持ちを想像し、寄り添うことができる。	0.001	0.526
18 他の人が考えていることを理解することができる。	0.003	0.497
19 集団の中で協力し、協調性がある。	0.000	0.624
20 表情やしぐさをみれば、その人の気持ちがわかる。	0.000	0.778
21 人や場所に応じた挨拶ができる。	0.003	0.493
22 グループワークで自分の考えを他者にわかりやすく話すことができる。	0.001	0.552
23 人と雑談することができる。	0.028	0.352
24 必要な時に人に連絡したり、報告したり、相談できる。	0.000	0.638
25 他者の皮肉や冗談に対して柔軟に対応できる。	0.021	0.390

(3)看護学生の看護実践適応に向けた教育プログラムに関する検討

“ 実習を問題なくクリアできるか ” という基準に、評価する教員の個人差が生じる可能性があるため、教員 2 名の「評価者間一致度(率)」を確認する必要がある。2名の教員が、気になる学生(問題ありの学生)と気にならない学生(問題なしの学生)を想定し、チェックリストを使用した評価を試みた。その結果、「看護学実習における学生の行動特性チェックリスト」の教員二評価者間の一致率は高い結果であり、本研究で作成したチェックリストの信頼性・妥当性が明らかになった。

同時に、「看護学実習における学生の行動特性チェックリスト」を活用することによって、看護学実習での学習困難な気になる学生と気にならない学生の行動特性を弁別することが可能だと言える。本調査で明らかになった看護学実習における学習困難な状況にある看護学生に共通の行動特性は、『物事の見通しを立てて、段取りをイメージできる』、『物事の優先度を考え、計画的に課題に取り組める』、『失敗してもパニックにならず対処できる』等、計画実行能力や選択・課題解決能力などの課題対応能力に関すること、『他者の思いや考えを受け入れ、尊重することができる』、『集団の中で協力し、協調性がある』、『表情やしぐさをみれば、その人の気持ちがかかる』等、他者理解やコミュニケーション能力に関することや、『必要な時に人に連絡をしたり、報告をしたり、相談できる』など、社会形成能力や職業的役割認識に関連するものであった。したがって、発達障害の可能性があり、看護学実習において学習困難な状況にある学生の看護実践適用を推進するためには、看護基礎教育の中で、看護学実習前からの実習内容・方法・ルール・ルの視覚的提示や実習での行動のイメージ化を図る指導が必要である。また、看護学実習中の困難状況を回避するためのサポート方略を明確化するとともに、学習や生活上の自己管理方法や社会的スキルについての個別指導を組み入れた教育プログラムの構築が示唆された。

本研究の結果から、看護学生の看護実践力を育成する看護学実習において、学習困難な状況に陥りやすい学生の行動特性を『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』から捉えることができれば、学生への効果的な支援方法や支援の在り方に繋がるのではないかと考える。本研究によって、『看護学実習における学生の行動特性チェックリスト』の信頼性や妥当性を確認できたことには、看護教員のみならず看護学生にと

っても自己の行動特性の傾向を踏まえた行動変容や支援方法がわかり、看護学実習の円滑な遂行に繋がるため、看護専門職を育成する一助になるのではないかと考える。また、看護学生の自信や看護学に関する学習意欲を高めるとともに、関わる教員の負担や困難感の軽減に繋がる。さらに、学生が時間をかけて看護実践に求められる能力を習得できることにより、看護職者としての就業移行が円滑になり、看護職者の人材確保・定着に寄与すると考える。

<引用文献>

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構:障害のある学生の修学支援に関する実態調査
http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/documents/h17_24_gaiyou.pdf (2013年10月30日付)
- 2) 松久眞実,金森祐治,今枝史雄,他:高等教育機関における発達障害のある学生への支援に関する実践的研究-研究の動向及び大学での実践事例を通して-,大阪教育大学紀要 第 部門,2,39-50,2012.
- 3) 森祥子,池松裕子,江川幸二,遠藤みどり
他:看護教員から見た,指導が著しく困難と感じる看護学生の現状,日本看護学教育学会第22回学術集会抄録集,53,2012.

5.主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

遠藤みどり,池松裕子,江川幸二,坂本玲子,井川由貴,山本奈央:看護学実習における行動特性チェックリストの信頼性・妥当性の検討,第30回日本看護学教育学会学術集会,2020.

6.研究組織

(1)研究代表者

遠藤 みどり (ENDO, Midori)
山梨県立大学・看護学部・教授
研究者番号:90279901

(2)研究分担者

池松 裕子 (IKEMATSU, Yuko)
名古屋大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号:50296183

江川 幸二 (EGAWA, Koji)
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号:90276808

坂本 玲子 (SAKAMOTO, Reiko)
山梨県立大学・人間福祉学部・教授
研究者番号:50300124
井川 由貴 (IGAWA, Yuki)
山梨県立大学・看護学部・講師
研究者番号:20453053

山本 奈央 (YAMAMOTO, Nao)
山梨県立大学・看護学部・講師
研究者番号:30509427